

いきなりですが、本校のグランドデザインで示している「4つのC」を覚えてくれましたか。Challenge(挑戦)、Collaboration(協働)、Critical Thinking(批判的思考)、Communication(対話)の4つの力を、自らの成長のために必要な力として掲げました。

今日は、そのうち「Challenge(挑戦)」について取り上げます。挑戦を続ける人物と言えば、大リーガーの大谷翔平選手や、将棋の藤井聡太棋士の名前を挙げる人も多いと思いますが、今回はあえてみなさんに馴染みがないであろう次の2人の人物を紹介します。

1人目は、19世紀を代表するイタリアの作曲家、オペラ王の異名を持つジュゼッペ・ヴェルディです。代表作には『椿姫』、『運命の力』、『アイダ』などがあります。ヴェルディの名は知らない人が多いと思いますが、オペラ『アイダ』の第2幕で演奏される「凱行進行曲」はサッカーの応援歌として有名ですので、この曲はみなさんも耳にしたことがあると思います。なぜサッカーの応援歌にクラシックなのか？ これには諸説あるようですが、一説によると、かつて中田英寿選手がイタリアセリエA時代に在籍していたチーム、パルマFCがあったパルマの町は実はヴェルディの出身地で、このパルマFCでは、町の偉人であるヴェルディの作品の中でも、特に有名な「凱行進行曲」を古くから応援歌としていたのです。中田選手はこの「応援歌」をととても気に入り、そのことを自身のホームページに掲載しました。これを見たサポーターたちが、中田選手を応援する際にスタジアムで歌い出したことがきっかけとなり、この「凱行進行曲」が一躍サッカー応援歌の代名詞的な存在となったそうです。戦いに勝利した将軍の凱行帰国シーンのために作曲された「凱行進行曲」、その勇敢な旋律が、選手やサポーターの闘志を奮い立たせるのかもしれないですね。さて、生涯に数々の作品を残したヴェルディですが、80歳にして最後のオペラ作品を作曲しました。彼は「いつも失敗してきた。だから、もう一度挑戦する必要があった。」という言葉どおり、80歳という年齢にもかかわらず、より困難な目標を掲げて挑戦し続けたのです。

2人目は、20世紀前半に活躍した、喜劇王ことイギリスの俳優チャールズ・チャップリンです。山高帽に大きなドタ靴、チョビ髭にステッキという扮装のキャラクターで人気者になり、映画史の中で最も重要な人物のひとりとされています。チャップリンのキャリアは70年以上に及び、その間に『モダン・タイムス』、『独裁者』、『ライムライト』などの多くの作品を発表しました。このうちチャップリンが自ら監督・製作・脚本・主演を務めた『独裁者』は、ユダヤ人虐待などを行ったナチスドイツのアドルフ・ヒトラーの独裁政治を、大胆に非難し風刺した作品です。また、チャップリンは小泉八雲の書物を読んで以来、日本に興味を持ち、生涯において4回来日しました。初来日したのは1932(昭和7)年5月14日ですが、この翌日には、当時の犬養毅首相が暗殺された五・一五事件が起きました。この時、チャップリンの暗殺も計画されていたと言われます。ある時、インタビューの中で「あなたの最高傑作はどれですか？」と質問されたチャップリンは「ネクストワン(次回作)」と答えたそうです。現状に満足することなく、あくなき向上心と探究心を持ち、常に新たな挑戦を続け、過去の自分を越えようとする姿勢があったからこそ、アカデミー賞をはじめ数々の賞を受けたのだと思います。

ここに紹介した2人に共通することは、常にあきらめず、失敗を恐れず、向上心を持ち、さらに高い目標に向かって挑戦を続け、努力する姿勢です。最後に、京セラ、KDDIの創業者である稲盛和夫氏の言葉を紹介します。「世の中に失敗というものはない。チャレンジしているうちは失敗はない。あきらめた時が失敗である。」さあ、みなさんも、新たな挑戦を続けてください。